

## 巻 頭 言

吉川 寛

大学英語教育学会中部支部長

JACET 中部支部の創立総会が開かれたのは 1983 年 6 月 5 日であり、支部会員数約 130 名での発足であった。総会では、当時の会長小川芳男先生が「国際化時代の英語」という演題で特別講演をされている。それから 21 年を経た今年 2003 年の支部会員数は約 320 名となり、その間、中部支部長も、初代の直井豊先生に次ぎ、田中春美先生、小野経男先生、丹下省吾先生、津田早苗先生、菅原光穂先生、山中秀三先生、そして不肖吉川へとバトンタッチされた。対象とする英語そのものも、「国際化時代の英語」から「国際語としての英語」へと、響きは一見似ているが、実は質と量の両面で確かな変化をとげてきている。

過去 20 年の英語を取り巻く国際環境の変化は日本の英語教育にも自発的、外圧的な変化を生み出してきた。英語の「国際語」としての地位の飛躍的な高まりと英語使用者の急増に伴い、それに対応できる「新しい」英語教育が早急に求められてきたということだ。現在アジア、アフリカを中心に様々な「新しい英語」が出現し、その非母語話者人口が英語圏の母語話者人口をはるかに上回る状況となっている。しかし、これまでの日本の英語教育は、その学習対象を英米の標準英語とその文化に偏向的に限定してきた経緯がある。外交、学問、経済、文化交流等、様々な分野で国際的に使える英語の重要性が切実に求められている中で、英米語や英米文化に限定されない「非母語話者英語」の価値をも積極評価してゆく姿勢こそが求められていると言えよう。様々な課題や批判を包含しつつも、このような「英語の国際語化」とそれに伴う英語の多様化を肯定的に捉え、日本の英語教育を見つめ直すべき時代が到来していることは疑えない。

近年『21 世紀日本の構想』懇談会による「英語公用語論」、小学校での英語教育の導入、「英語が使える日本人の育成のための戦略構想」等、政府主導の英語教育構想が矢継ぎ早に提言され、部分的に実施されている中で、大学英語教育関係者にも的確な英語の現状把握・責任ある展望・対処が求められている。具体的には、「国際語」としての現代英語の姿を適切に認識し、学習過程と目標において学習者のアイデンティティーとの整合性をも維持し、高度な運用能力を養成して行く英語教育こそが求められていると言えよう。また理念的には、どのような意味において英語が「国際語」であるのか、現代英語がどのような質的变化をとげつつあるのかという「国際語」としての英語の現状と役割を確認すること、また、英語学習

と日本人のアイデンティティーとの関係等についても説得力ある回答を模索してゆかねばならないであろう。

上述の状況下では、これまで以上に英語教育に対する研鑽と工夫が必要になってくる。英語教育の理論と実践の両面における研究水準の向上が求められているのである。このような時期に待望の JACET 中部支部紀要を刊行しえた意義は大きいと言えよう。この紀要が支部会員諸姉諸兄の研究成果発表の場たるのみでなく、会員相互の討議と共通認識形成の契機ともなり、支部活性化推進の一つの力となることを希望して止まない。また、本誌の今後の発展と充実のために会員諸氏の一層の寄与と貢献を心からお願いしておきたい。刊行に際しては、編集委員をはじめ多くの方々からご尽力とご協力をいただいた。この紙面をお借りして感謝の意を表したいと思う。